令和七年度

滝川第二中学校　入学考査　問題

A1日程

国語

（五十分・百五十点）

注意事項

1　問題は1ページから17ページまであります。
2　解答は、すべて解答用紙の枠内に記入しなさい。
3　「開始」の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
4　受験番号と氏名を、解答用紙と問題冊子の表紙に正しく記入しなさい。
5　「終了」の合図で筆記用具を置き、監督の先生の指示に従いなさい。

受験番号	氏　　名
一	

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（指定された字数には、句読点その他の符号もそれぞれ一字としてふくみます。）

①イネ科植物は、もっとも進化したグループの一つであると言われている。

イネ科植物は、乾燥した②草原環境で発達を遂げた植物である。

草原は、植物にとっても過酷な環境である。

植物にとっても、乾燥した大地で生きていくことは簡単ではないのだ。

しかし、植物が戦わなければならない相手は過酷な環境だけではない。

植物は他の生物のエサになる存在である。

木々が生い茂る深い森であれば、すべての植物が食べ尽くされるということはない。しかし、草原に生える植物は少ない。草食動物たちは、生き残りをかけて、限られた植物を奪い合って食べあらす。

荒地に生きる動物も大変だが、植物の立場に立ってみれば、そんな草食動物の脅威にさらされている中で身を守らなければならないのだ。

動物に食べられないようにするためには、毒で身を守るという方法もある。

（　A　）、毒を生産するためには、根から吸った栄養分を材料として使わなければならない。

じつは、毒で身を守る方法は、植物にとっては、贅沢な身の守り方である。

やせた大地に育つイネ科植物にとって、それは簡単なことではない。

（　B　）、イネ科植物は葉を固くするという方法を採用した。

じつは、土の中には、ガラスの原料にもなるケイ素という物質が含まれている。このケイ素は、吸収しても栄養にならないので、多くの植物はケイ素を吸収して利用することはない。しかし、イネ科植物はこのケイ素を積極的に吸収することを試みた。そして、ケイ素で葉をガラスのように固くして身を守ろうとしたのである。

（　C　）、イネ科植物は、葉の繊維質を多くして、食べられても消化されにくいようにした。

「固くて美味しくない葉っぱ」に進化したのである。

イネ科植物の工夫は、それだけではない。

イネ科植物は、他の植物とはまったく異なる姿かたちをデザインした。

普通の植物は、茎の先端に③成長点があり、新しい細胞を積み上げながら、上へ上へと伸びていく。

ところが、このスタイルでは、草食動物に茎の先端を食べられると大切な成長点がダメージを受けることになる。

そこで、イネ科の植物は成長点を低い位置に置いている。驚くことに、イネ科植物の成長点があるのは、地面の際である。

イネ科植物は、茎を伸ばさずに根元に成長点を持ちながら、上へ上へと葉を押し上げる。このスタイルであれば、いくら食べられても、葉っぱの先端を食べられるだけで、大切な成長点が傷つくことはないのである。

工夫はそれだけにとどまらない。

成長点が地面の際にあるので、大切な栄養分は成長点に近い根っこに蓄えるようになった。そして、葉っぱは、ほとんど栄養のない状態にしたのである。

草食動物にとって、イネ科植物は、「固くて、美味しくなくて、栄養がない」葉っぱである。

エサとしての魅力を失うことで、イネ科植物は草食動物の食害から身を守ろうとしたのである。

しかし、草食動物の方も黙ってはいない。

何しろ、草原にはイネ科植物ばかりが生えている。

どんなに固かろうと、どんなに栄養がなかろうと、このイネ科植物を食べなければ、生きていくことができないのである。

そのため、草食動物たちは、イネ科植物をエサにするための必死の進化を始めた。

まず固い葉をすりつぶすような、丈夫な歯を発達させた。

しかし、何とか胃腸に送っても、固くて消化しにくい上に、栄養はない。

そこで、草食動物は、胃腸の中で微生物を働かせて、イネ科の植物を分解するという方法を発達させた。

たとえば、ウシの仲間は胃を四つ持つことが知られている。

まず一番目の胃は、容積が大きく、食べた草を貯蔵できるようになっている。そして、胃の中の微生物が働いて、草を分解する発酵槽の役割をしているのである。

二番目の胃は、食べ物を食道に押し返す働きをしている。そして胃の中の消化物を、もう一度、口の中に戻して※咀嚼する反

栄養のほとんどないイネ科植物だけを食べているにしては、ウシやウマは体が大きい。どうして、ウシやウマはあんなに大きい体を維持できるのだろうか。

イネ科植物は固くて栄養がない。そのため、イネ科植物を消化するためには、食べたものを大量に貯蔵して、ゆっくりと消化しなければならない。そして、四つもある胃や、長く発達した盲腸のような特別な内臓を持たなくてはならないのだ。

さらに、栄養の少ないイネ科植物から栄養を得るためには、大量のイネ科植物を食べなければならない。

この、大容量で発達した内臓を持つためには、容積の大きな体が必要になる。

イネ科植物をエサにするウシやウマは、体を大きくしなければ生きていけなかったのである。

こうして、食べられたくないイネ科植物と、食べなければ生きていけない草食動物は、競い合うように進化をしていった。

そして草が生え、草を食む草食動物が暮らす草原の環境が作られていったのである。

農業が始まったメソポタミアは、まさにそんな乾燥した草原地

芻という行動をするのである。牛がエサを食べた後、寝そべって口をもぐもぐとさせているのは、この反芻をしているのである。

さらに三つ目の胃は、食べ物の量を調整して、食べ物を一番目の胃や二番目の胃に戻したり、食べ物をさらにすりつぶして、食べ物を消化吸収する役割がある四番目の胃に送ったりしている。こうしてイネ科植物を前処理して葉をやわらかくし、さらに微生物発酵を活用して栄養分を作り出しているのである。

ウシだけでなく、ヤギやヒツジなどの草食動物も反芻によって植物を消化することが可能になった※偶蹄目の動物である。

一方、ウマは偶蹄目ではなく、※奇蹄目に分類される動物である。

ウマは胃が一つしかない。その代わり、長く発達した盲腸の中で、微生物が植物の繊維分を分解するようになっている。

ただし、この方法は偶蹄目の動物の反芻に比べると、効率が悪いようである。

④現在、草原で暮らす草食動物は、偶蹄目の動物が占めている。

このように、草食動物は、さまざまな工夫をしながら、固くて栄養価の低いイネ科植物を消化吸収し、栄養を得てきた。

しかし、不思議なことがある。

帯だった。

草原で食べ物がないのは、人類も同じである。

人間はイネ科植物の葉を食べることはできない。

そこにいたのは、イネ科植物の葉を食べて暮らす草食動物であった。

しかし、狩りをして草食動物を獲れればよいが、それは簡単ではない。

そこで人々は、草食動物を飼育することを始めた。

「牧畜」の誕生である。

人間はイネ科植物の葉を食べることはできないが、草食動物にそれを食べさせれば、肉や乳などを得ることができる。結果的に、たくさんあるイネ科植物を利用することができるのだ。

しかも草原の草食動物は、家畜として優れた特性を持っている。

草原で暮らす草食動物は、肉食動物から身を守るために群れで行動をする。そのため、群れのリーダーに対して従順である。リーダーが人間に代わったとしても、おとなしく従う性質を持っているのだ。

さらには、群れで行動しているから、高い密度で飼育することもできる。草原で進化をした草食動物は、家畜として優れた性質を身につけていたのである。

牧畜が始まってからも、イネ科植物は、人間にとって食べることのできない植物であった。

しかし、人間はやがて、種子を落とさないイネ科植物を発見して、栽培をするようになる。そして、イネ科植物のために「労働」を続けることになったのだ。

（　D　）、イネ科植物の中で日本人にもっとも関係の深い植物は何だろう。

それはもちろん「イネ」である。

「実るほど（　I　）を垂れる稲穂かな」という慣用句があるが、そういえば、イネもまた重い稲穂を垂れ下げても、種子を落とさないイネ科植物である。

もしかすると、イネもまた、私たち日本人の生活に何か影響を及ぼしているのだろうか。

（稲垣栄洋「植物たちの不埒なたくらみ」より。なお、作問の都合上、一部改変してあります。）

注　咀嚼…口の中で食べ物をかみくだいて、味わうこと。
偶蹄目…第三指と第四指の二本が発達し、第一指は退化して、二本あるいは四本のひづめをもつ、ほ乳類。
奇蹄目…第三指を中心につま先立ちをし、走るのに適した体制をもつ、ほ乳類。

問一　（　A　）～（　D　）に入ることばとして適当なものを、次の**ア**～**オ**から選び、記号で答えなさい。（同じものは二度選べません。）

ア　つまり　　**イ**　さらに　　**ウ**　さて
エ　そこで　　**オ**　しかし

問二　――線部①「イネ科植物は、もっとも進化したグループの一つ」とありますが、イネ科植物の進化について説明した次の文の【　　】に入ることばを、本文中から二十二字で書きぬきなさい。

草食動物にとって、イネ科植物が
【　　】をもつものへと進化した。

問三　――線部②「草原環境」とありますが、草原環境は植物にとってどのような環境ですか。これについて説明した次の文の【　　】に入ることばを、【　**ア**　】は十四字、【　**イ**　】は七字で、本文中から書きぬきなさい。

植物が【　**ア**　】を強(し)いられるのに加えて、【　**イ**　】としてねらわれる環境。

問四　――線部③「成長点」とありますが、それに関して、イネ科の植物はどのような工夫をしましたか。その内容として最も適当なものを、次の**ア**～**オ**から選び、記号で答えなさい。

ア　草食動物が食べにくくなるように、茎の先端に成長点を移動させ、新しい細胞を積み上げながら成長するようにしたということ。

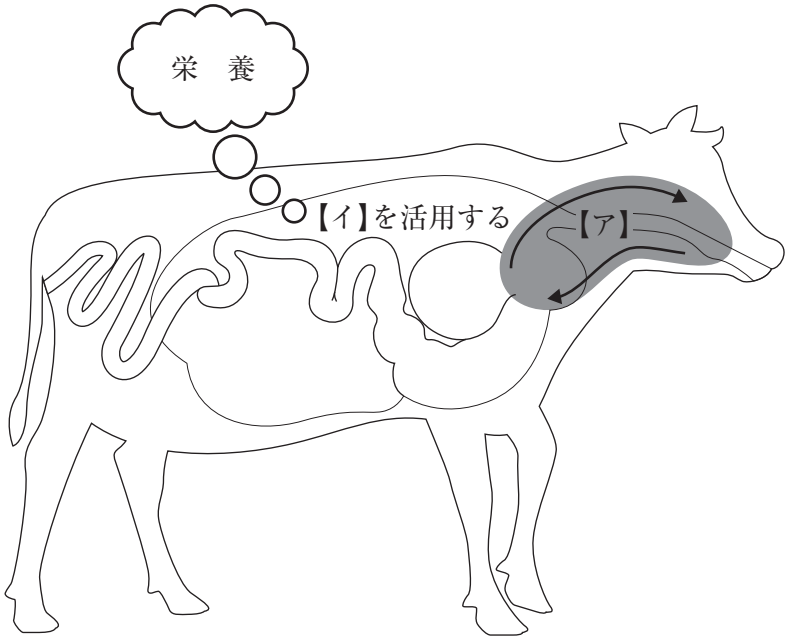
イ　草食動物に食べられないように、土の中から積極的にケイ素を吸収し、毒で身を守ったということ。

ウ　草食動物に成長点を食べられてダメージを受けないように上へ上へと成長点を押し上げたということ。

エ　根元に成長点を置き、大切な栄養分は成長点に近い根っこに蓄えるようにしたということ。

オ　草食動物に食べられないように、大切な栄養分を成長点から離（はな）し、根っこに蓄えるようになったということ。

問五　本文を読み、ウシの消化について説明した次の絵の【　　】に入ることばを、【　ア　】は漢字二字、【　イ　】は漢字五字で、本文中から書きぬきなさい。



問六　――線部④「現在、草原で暮らす草食動物は、偶蹄目の動物が占めている」とありますが、偶蹄目の動物より奇蹄目の動物のほうが少ないのはなぜだと考えられますか。本文中のことばを使って、三十字以内で書きなさい。

問七　（　Ｉ　）に入る体の一部を表すことばを、漢字一字で答えなさい。

問八　本文の内容についてＡさんとＢさんが話し合いをしています。次の会話文を読んで、【　　】に入ることばを、【　ア　】は八字、【　イ　】は五字で本文中から書きぬき、【　ウ　】は「仕事などを共同でするときの相手」という意味のことばをカタカナ五字で自分で考えて答えなさい。ただし、二つある【　イ　】には同じことばが入ります。

Ａさん　食べられたくないイネ科植物と、食べなければ生きていけない草食動物が、競い合うように進化をしていった話は興味深いね。

Ｂさん　草食動物はイネ科植物を食べるように進化したわけだけれど、人間もやがてイネ科植物を食べるようになったとあったね。

Ａさん　【　ア　】種のイネ科植物の存在によって、人間はイネ科植物の【　イ　】ようになったんだね。

Ｂさん　他の生物と同様、植物も次の世代に命をつなげることを目標としているのだから、人間がイネ科植物の【　イ　】ことによって、人間はイネ科植物の目的をかなえるための【　ウ　】になったと言えるんじゃないかな。

問九　本文の内容として最も適当なものを、次の**ア**～**オ**から選び、記号で答えなさい。

ア　ウシやウマの身体が大きいのは、イネ科植物を大量に食べることによって、栄養を過多に得ているからである。

イ　牧畜を始めたのは、人間が食べ残したイネ科植物をエサとして利用し、草食動物から肉や乳などを得るためである。

ウ　草食動物はイネ科植物を食べるために、丈夫な歯を発達させ、同時期に胃腸の中での分解の方法をも発達させた。

エ　ウシの三つ目の胃は、消化吸収をする四番目の胃に送るだけでなく、一、二番目の胃に食べ物を戻すこともできる。

オ　多くの植物は、草食動物に食べ尽くされないために、ケイ素で葉をガラスのように固くして身を守るよう進化した。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（指定された字数には、句読点その他の符号もそれぞれ一字としてふくみます。）

秋に、ちょっとした出来事があった。御木元さんがクラス対抗の合唱コンクールの指揮者に選ばれたのだ。彼女が指名されたのは、音楽家の娘だという噂が広まっていたせいもあるけれど、その協調性のなさを腹立たしく思っている人もけっこういたからだと思う。

明泉という学校は行事が多い。合唱コンクールはちょうど文化祭が終わってひと息つこうとしたタイミングで行われるので、つい受け流す恰好になってしまう。クラス委員としてはなるべく盛り上げたいとは思うものの、誰も真剣に取り組もうとはしない行事だった。

いやいや引き受けたに違いないのに、御木元さんは途轍もなかった。①特別としかいいようのない光を私たちに見せてくれた。彼女にしてみれば、特別なつもりもなかったのかもしれない。指揮者になったことで光が漏れた、そんな感じだった。

級友たちをどうにか引っ張っていくために四苦八苦する彼女は、自分では歌わず、指揮と指導に徹していた。それでも彼女が各パートの出だしや山場を歌って示す、その歌声に触れただけで身体に鳥肌が立つようなことが何度もあった。そういうとき、私は昂揚し、かえってうまく声が出なくなってしまう。光り輝くような声の主を、ただ見つめていることしかできなかった。

練習を重ねるにつれ、歌うことってこんなに奥が深いのかと目が覚めるようだった。ときたまみんなの声がぴたりと重なると、合唱の楽しさに触れることができた気がして、よろこびがこみ上げた。

ただし、この人を指揮者にしてしまったのは間違いだったとたぶんクラス全員が思っていただろう。指揮者は歌えない。御木元玲の声を封印してしまったのはあまりにももったいなかったという後悔。それに、彼女の歌がうますぎて自分が歌う気がなくなってしまうという子もいたし、歌い手としては素晴らしいけれど——素晴らしいからこそ——指導者としては不向きだなどという声も挙がっていた。

御木元さんは、級友たちがやる気のないふりをしていると思っていたみたいだ。少しは燻っているはずの、歌いたい気持ちを刺激しようとした。まずは声を出させるところから始め、声を合わせたときの気持ちよさを私たちに教えようとした。残念ながら

ポーズなんかじゃなく、みんなほんとうにやる気がなかったのだけれど。そして、こっそりとやる気のあった何人かにしたって、彼女の要求にしっかり応えられるような力量はなかった。

私も小さい頃からピアノを習っていてそこそこ弾けたから多少の音感はあるはずだったのに、御木元さんのハーモニーの追求は②生半可じゃなかった。否定されるような気分になった子がいたのもわかる。私たちにそこまで求めてもしかたないと思うよ、と何度いいたくなったことか。無理だということがわからないのか、わかっていても妥協ができないのか、彼女の指導は厳しくて、ただでさえ集まりが悪かったのに回を追うごとに人が集まらなくなった。しかたないよ、と私は思った。今度はクラスメイトたちに対して。御木元さんにはこうすることしかできない。音楽に関して、歌うことに関しては、こんなふうに③がっぷり四つに組む以外に彼女には手はないんだ。

私はそれをクラスメイトたちに伝えられなかった。彼女の歌声に、そして合唱を導こうとする情熱に圧倒されて、すごい、すごい、この人はすごい、と涙が出そうだったのだ。④御木元さんのことが猛烈に羨ましかった。敵わない。歌ではもちろん、人間としてぜんぜん敵わない。勉強そのものが好きなわけでもないのに勉強してクラス委員をやっているだけじゃ、だめだ。それは勤勉ではなく、むしろ※サボタージュなんじゃないか。初めから（　A　）を捨ててしまうのは、逃げているってことなんじゃないか。

でも、どうすればいいのかわからなかった。ずっと人のまとめ役で、今さら自分にも何かほしい、何者かになりたいなんて、いったい何をどうすればいいのだろう。べつにいちばんにならなくたっていい。ただ一所懸命になれる何かがほしくてたまらなくなった。

合唱コンクールの前後、無口になってしまった私を友人たちが気遣ってくれた。どうかしたの、とか、ひかりらしくないよ元気出してよ、とか、たくさんの子が声をかけてくれた。やりにくいよね御木元さんて、なんて眉をひそめる子もいた。

「なんか、わかるよ、ひかりの気持ち」

そうつぶやいたのは千夏だった。千夏は合唱コンクールでピアノを担当していた。お気楽そうな千夏に何がわかるのかと思ったけれど、意外に真剣な目を見たら何もいえなくなってしまった。

【　Ⅰ　】

千夏はいい、それからにっこりと笑った。

【　Ⅱ　】

半分くらい、同じ気持ちだ。でもあとの半分では、羨んでいる。春もなく夏も秋も冬も無視して、歌うことで何の迷いもなく進んでいける御木元玲と、なんにもない私。

【　　Ⅲ　　】

聞くと、ちょっと考えてから千夏は答えた。

【　　Ⅳ　　】

のんきだな、と思う。あたしたち、と一緒にされたのもなんだか面白くない。ただ、これから、という千夏の言葉に賭けてみたい気もした。そうでなければ、私は一生冬のまま、春から目を逸らして生きていかなければならない。

あのときから、何が変わったのだろう。

クラス替えを目前にして、このクラスでもう一度合唱コンクールの歌を歌わないかという提案が担任の浅原から出されている。また御木元さんの力を見せつけられることになる。わかっていたけれど、はい、と答えた私の気持ち。クラスのみんなの気持ち。そして御木元さんの気持ち。⑤ほんの何か月か前のあの頃とは変わっているのがわかる。

冬のマラソン大会で、私たちはもう一度あの歌を歌うことになった。合唱コンクールではさんざんな出来に終わった『麗しのマドンナ』を、マラソン大会で走る御木元さんの応援歌として歌ったのだ。そのときに思いがけず見た彼女の一粒の涙が私たちの胸を濡らした。彼女を固めていた雪が溶けかけているのがわかった。

たったそれだけで、だ。私たちは変わった。毎日、昼休みや放課後に十五分ずつ続ける練習にほとんどクラス全員が揃うようになった。

本番直前となった今日からは、浅原の※肝煎で終礼の時間から音楽室を使わせてもらっている。ただし、浅原本人は顔を出さない。先に見ちゃったらつまんないじゃない、と彼女はあくまでも陰から楽しむつもりらしい。

「ここは明るく歌うところなの。もう歌詞も覚えたでしょ？　できるだけ楽譜は見ないで、顔を上げて」

御木元さんの指示で三十の顔が上がる。

「じゃあ四十八小節、出だしから」

千夏のピアノが鳴り、みんなが歌い出すとすぐにまた御木元さんが腕を振って歌を止めた。

「もうちょっと明るく歌おう。マドンナたちの華やいだ気持ちになって。さあ、明るい顔をして」

そういって自ら明るい笑顔をつくってみせた。そうして、こちらを見渡して、

「明るい顔ってわかる？　頬骨を上げて。そう、そして目の奥を開けて。はい、各自十回、目の奥を大きく開けて、閉じて、開けて」

えー、どうやってー、とあちこちから声が上がった。

「目の奥に扉があると思ってみて。そこを大きく開くイメージ」

御木元さんは大きく目を見開いている。くすくす笑い声が聞こえる。

「あれって扉じゃなくて目そのものじゃん」

早希が小声でいい、それでも真似をして大きく目を開いている。

すごいなあ、と私は素直に感心している。御木元さんがこんなふうに指示を出せる。みんながそれに従っている。音楽というのは、お互いの親密さと信頼があって育っていくものらしい。マラソン大会のゴール前で芽を出した私たちの歌は、時間をかけて、今、ゆっくりと双葉を開いたところくらいだろうか。

「そうそう、いいね、そんな感じ。みんないいかな、顔の明るさを忘れないで。これで声の※ピッチが揃うよ」

御木元さんの右手が挙がり、千夏のピアノが弾む。

よろこびの歌がはじまる。ほんとうだ、みんなの声が明るくなっている。

御木元さんが指揮の腕を大きく振るその※軌跡から音楽があふれ出す。私たちの声が伸びていく。重なっていく。弾み、広がり、膨らんでいく。

歌が終わっても、まだ光の粒がそこかしこに残っているような感じがする。汗ばむような熱気を逃したくて、窓を開けに立つ。重いサッシを開くと、さっと風が入り込んできた。頬に受ける風が気持ちいい。もうすぐ、春だ。

三月に入れば卒業式がある。その前日、卒業生を送る会で歌うのがこの合唱のゴールになる。

「ものすごく楽しみにしてるからね」

浅原は教師らしからぬ不敵な笑みで私たちを挑発する。のるよ。受けて立つよ。クラス委員はクラスの気持ちを代表して胸を張る。

「ひかり、それじゃ浅原の思うツボだって」

「合唱は気合いで歌うものじゃないってわかってるよね、ひかり」

意気込む私にあやちゃんが、史香が、みんなが口々に声をかける。ああ、こういうとき、春なんじゃないかな、と思う。今、もしかすると私は春のまっただ中にいるんじゃないか。

御木元さんが一度、手を大きく打った。

「じゃあ今日の仕上げ。最後にもう一度、通していってみよう」

その声で、音楽室の中がしんとなる。

「さあ、明るい気持ちを忘れないでね。あ、待って、ひかり、背筋を伸ばそう」

はい、と姿勢を正しながら、⑥小さな驚きとよろこびに打たれてしまった。今、御木元さんが、ひかり、と呼んだ。佐々木さんから、昇格だ。

（宮下奈都「よろこびの歌」より。なお、作問の都合上、一部改変してあります。）

注　サボタージュ…なまけること。

肝煎…両者の間を取りもって世話すること。

ピッチ…音の高さ。

軌跡…動きのあと。

問一　――線部①「特別としかいいようのない光」とありますが、何の例えですか。漢字二字で自分で考えて答えなさい。

問二　――線部②「生半可じゃなかった」とありますが、その意味を、次の**ア**～**オ**から選び、記号で答えなさい。

ア　中途半端ではなかった　　**イ**　未熟ではなかった

ウ　生々しくなかった　　**エ**　厳密ではなかった

オ　融通がきかなかった

問三　――線部③「がっぷり四つに組む」とありますが、この場面ではどのようなことを指していますか。その説明として最も適当なものを、次の**ア**～**オ**から選び、記号で答えなさい。

ア　時間がかかっても着実に合唱を完成に近づけていくこと。

イ　合唱練習でクラスメイトとの対決を覚悟すること。

ウ　合唱に対して、一切妥協せず、正面から取り組むこと。

エ　合唱コンクールに向けて、クラスが一致団結すること。

オ　指導の厳しさをクラスの技量に合わせていくこと。

問四　――線部④「御木元さんのことが猛烈に羨ましかった」とありますが、「私」は御木元さんのどのような点を羨ましいと思っていますか。これについて説明した次の文の【　　】に入ることばを、【　ア　】は八字、【　イ　】は四字で、本文中から書きぬきなさい。ただし、二つある【　ア　】には同じことばが入ります。

私には【　ア　】ものはないが、御木元さんは【　イ　】に関して、【　ア　】ものを持っている点。

問五　（　A　）に入る四季の一つを漢字一字で答えなさい。

問六　【　Ⅰ　】～【　Ⅳ　】に入る会話文として適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　「……これからじゃないかな。なんにもないんだから、これからなんじゃないの、あたしたち」

イ　「それなのに、不思議なんだ、見ていたいんだよ。御木元さんにはどんどん進んでいってほしいし、それをずっと見ていたい気持ちになるんだ」

ウ　「御木元さんを見てると、自分にはなんにもないんだな、ってつくづく思うよ」

エ　「なんにもないって思わされて、平気？」

問七　――線部⑤「ほんの何か月か前のあの頃とは変わっているのがわかる」とありますが、合唱コンクールのときにはなく、今のクラスにはあるものは何ですか。本文中から十字で書きぬきなさい。

問八　――線部⑥「小さな驚きとよろこびに打たれてしまった」とありますが、私はどのようなことに「小さな驚きとよろこび」を感じたのですか。これまでの二人の関係からの変化にふれて、自分のことばを使って書きなさい。

問九　後の発言は、この文章を読んだ生徒五人が、文章から読み取れたことを述べたものです。本文に描（えが）かれている内容として適当なものを、次の**ア**～**オ**から二つ選び、記号で答えなさい。

ア　Aさん　　**イ**　Bさん　　**ウ**　Cさん
エ　Dさん　　**オ**　Eさん

Aさん　卒業生を送る会での練習では、合唱に対する「私」の思いが変化していたね。合唱コンクールの練習では合唱の楽しさを理解できていなかった「私」が、合唱によろこびを見出すようになっていたね。

Bさん　クラスメイトに対する御木元さんの気持ちが変化していたね。合唱コンクールの練習において、初めはクラスメイトの指導に熱意を持っていたけれど、クラスメイトのやる気のなさを見て、失望していたね。

Cさん　文章の半ばで、クラスメイトの歌唱力が変化していたね。合唱コンクールはさんざんな出来に終わったけれど、御木元さんに隠（かく）れて練習をしていたマラソン大会では、すばらしい歌声を出せるようになっていたね。

Dさん　マラソン大会で応援歌を歌ったことによる御木元さんの涙をきっかけに、クラスメイトたちの御木元さんへの印象が変わっているね。固めていた雪が溶けかけているという表現から、印象の変化を読み取れるよ。

Eさん　「私たちの歌」を双葉が開いた時期に例えていて、歌がまだ完成していないことがわかるね。しかし、文章の終わりの場面から明るい印象が読み取れることから、卒業式での合唱がよいものになることが想像できるよ。

三　次の文章中の――線部を慣用句を用いて後の文章のように書き直したとき、□に入る漢字一字を答えなさい。

次の対戦相手は、うちのチームには①簡単に勝てるって決めつけているようだから、攻撃力（こうげきりょく）において②飛びぬけてすぐれている選手が入ったのを、秘密にしておこうと思うんだ。試合が始まって、相手が気付いた時には、もう③今にも命が尽きてしまいそうになっているはずさ！　この作戦のことは④親しい付き合いの君にだけ⑤包み隠さずに話しておくことにするよ。

次の対戦相手は、うちのチームには①簡単に勝てると□をくくっているようだから、攻撃力において②□をぬいている選手が入ったのを、秘密にしておこうと思うんだ。試合が始まって、相手が気付いた時には、もう③□の息のはずさ！　この作戦のことは④□が置けない君にだけ⑤□を割って話しておくことにするよ。

四　次の(1)～(4)の百人一首の□には【光・花・夜・鳥・風・月・道】いずれかの漢字が一つずつ入ります。どの漢字が入るか答えなさい。

(1)　天の原　ふりさけ見れば春日（かすが）なる
　　三笠（みかさ）の山に出（い）でし□かも

(2)　夜をこめて　□の空音は　謀（はか）るとも
　　よに逢坂（おおさか）の　関は許さじ

(3)　□の色は　うつりにけりな　いたづらに
　　わが身世にふる　ながめせし間に

(4)　□そよぐ　ならの小川の　夕暮れは
　　みそぎぞ夏の　しるしなりける

五　次の――線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して書きなさい。

(1) 家で養生するように医師に言われた。
(2) 野菜を細かく刻む。
(3) 勉強計画を練る。
(4) 血液の流れがゆるやかな静脈。
(5) 生まれたばかりの乳児。
(6) 来場者のノべ人数を数える。
(7) ウチュウ旅行に行きたい。
(8) たんぽぽのワタゲが飛ぶ。
(9) 育てたジャガイモをシュッカする。
(10) 顔をコウチョウさせて照れる。